

大学入学共通テストの実施
函館市と包括連携協定を締結
総合イノベーション創発機構オープンセレモニーを挙



全学ニュース

- 1 大学入学共通テストの実施
- 2 北海道大学一般選抜の志願状況
- 3 フロンティア入試Type I 最終合格者の発表
- 4 国際総合入試合格者の発表
- 5 現代日本学プログラム課程「ゲストレクチャー・ワークショップシリーズ」を開催
- 6 キャリアセンター主催「ファイターズスポーツ&エンターテイメント社員協力 グループワーク実践講座」を開催
- 7 朴 喆熙駐日大韓民国特命全権大使による講演会を開催
- 8 函館市と包括連携協定を締結
- 9 北海道大学創基150周年記念募金（北大フロンティア基金）
- 12 令和6年度第4回北海道大学技術職員横断連携体験実習を実施
- 13 総合イノベーション創発機構オープンセレモニーを挙行
- 14 第1回北海道大学統合技術連携シンポジウムを開催
- 15 「北海道大学・NTT・NTT東日本との連携プログラム協議会及び技術交流会」を実施
- 16 JICAモンゴル事務所と連携し、インターンシップ・プログラムを実施
- 17 産学・地域協働推進機構が「みどりのワークショップ」を開催
- 18 体験型ワークショップイベント「メタバース×AIは人の暮らしに何をもたらすのか」を開催
- 19 小中高生向け起業家育成リアル謎解きゲーム「スタートアップシティからの挑戦状 in 北海道大学」を開催
- 20 第27回ソウル大学校-北海道大学ジョイントシンポジウムを開催
- 27 「北海道大学GHGインベントリ2022」を策定
- 28 日経ESGに総長インタビュー記事を掲載
- 29 北大生協北部食堂に「浄水型ウォータースタンド」を設置
- 30 「第20回世界冬の都市市長会議」において加藤 悟サステイナビリティ推進機構教授が講演
- 31 中学生対象の体験型科学実験教室を開催



第1回北海道大学統合技術連携シンポジウムを開催



JICAモンゴル事務所と連携し、インターンシップ・プログラムを実施



現代日本学プログラム課程「ゲストレクチャー・ワークショップシリーズ」を開催



キャリアセンター主催「ファイターズスポーツ&エンターテイメント社員協力 グループワーク実践講座」を開催

部局ニュース

- 32 生命科学院博士後期課程科目少人数討論型育成プログラム（北大成人ブレンストーミングワークショップ）「自分の研究・アイデアをビジネスにしよう」を実施
- 33 第19回医学研究院連携研究センター研究成果発表会を開催
- 34 工学研究院・情報科学研究院・量子集積エレクトロニクス研究センター・工学系事務部で「安全保障輸出管理FD・SDセミナー」を開催
- 35 環境科学院・地球環境科学研究院でFD研修会を開催
- 36 「森のたんけん隊2025冬」を開催
- 37 環境健康科学研究教育センター公開セミナー「日本におけるプラネタリーヘルスの取り組み」を開催
- 38 自分に合ったツールが見つかる「文献収集・管理ツール講習会」を開催

表敬訪問 39

人事 40

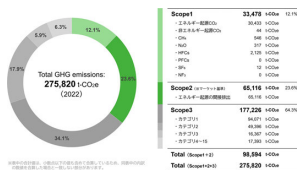
- 40 新任教授紹介



第1回北海道大学統合技術連携シンポジウムを開催



JICAモンゴル事務所と連携し、インターンシップ・プログラムを実施



「北海道大学GHGインベントリ2022」を策定



「第20回世界冬の都市市長会議」において加藤 悟サステイナビリティ推進機構教授が講演

表紙：大学入学共通テストの実施（関連記事1頁に記載）

裏表紙：キャンパス風景⁹⁹ 古河講堂（北9条西7丁目）

■全学ニュース

大学入学共通テストの実施

令和7年度大学入学共通テストが1月18日（土）及び19日（日）に、全国一斉に実施されました。

本学においても、実施本部、総務部、試験場部、救急医療部、連絡部及び広報部を置き、延べ約1,300人の教職員の協力により、無事終了しました。

全国の志願者は前年度より3,257人増加し、495,171人でした。

本学が担当する試験場（水産学部試験場、藤女子大学試験場を含む）の志願者は前年度より118人多い3,841人で、各試験場（会場）の受験状況は次のとおりです。

（学務部入試課）

令和7年度大学入学共通テスト受験状況

試験場（会場）名・志願者数	日 程		1日目										2日目							
	教 科		地理歴史、公民		国語		外国語【筆記】		英語【リスニング】		英語【リスニング】 再開テスト		理科①		数学①		数学②		理科②	
	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数
北海道大学試験場	農学部会場	397	356	41	360	37	359	38	355	42			302	95	309	88	307	90	304	93
	人文・社会科学総合教育研究棟会場	540	515	25	522	18	523	17	523	17			517	23	521	19	517	23	515	25
	理学部会場	391	352	39	371	20	371	20	368	23			330	61	340	51	320	71	328	63
	工学部会場	489	429	60	437	52	436	53	436	53			397	92	393	96	380	109	389	100
	高等教育推進機構A会場	458	430	28	434	24	439	19	439	19			440	18	439	19	435	23	428	30
	高等教育推進機構B会場	435	395	40	397	38	400	35	395	40			396	39	400	35	392	43	390	45
	保健科学研院会場	346	77	269	235	111	246	100	238	108			148	198	205	141	133	213	110	236
	高等教育推進機構N会場	7	5	2	6	1	6	1	6	1			5	2	5	2	5	2	5	2
藤女子大学試験場	500	440	60	448	52	445	55	441	59			420	80	413	87	393	107	410	90	
札幌地区 小計		3,563	2,999	564	3,210	353	3,225	338	3,201	362			2,955	608	3,025	538	2,882	681	2,879	684
			84.2%	15.8%	90.1%	9.9%	90.5%	9.5%	89.8%	10.2%			82.9%	17.1%	84.9%	15.1%	80.9%	19.1%	80.8%	19.2%
北海道大学水産学部試験場	278	248	30	253	25	253	25	253	25			66	212	240	38	231	47	229	49	
合 計		3,841	3,247	594	3,463	378	3,478	363	3,454	387			3,021	820	3,265	576	3,113	728	3,108	733
			84.5%	15.5%	90.2%	9.8%	90.5%	9.5%	89.9%	10.1%			78.7%	21.3%	85.0%	15.0%	81.0%	19.0%	80.9%	19.1%

※欠席者には当該教科を「受験しない」と申請し登録していない者も含まれる



受験風景

北海道大学一般選抜の志願状況

令和7年度の本学一般選抜の志願者は、前期日程5,248名、後期日程4,158名、合計9,406名で、昨年度と比較すると76名減少し、倍率は4.0倍です。

入学試験日は、前期日程が2月25日（火）・26日（水）、後期日程が3月12日（水）となっています。

各学部・学科等の志願者数は、次のとおりです。

(学務部入試課)

令和7年度北海道大学一般選抜志願者数

日程	学部・学科等	募集人員	志願者数	倍率	第1段階選抜 予告倍率	前年度 志願者数	前年度 倍率	総合型選抜 の欠員	変更後の 募集人員	変更後の 倍率						
前期日程	総合入試	文系	95	344	3.6	4.0	330	3.5	/							
		理系	数学重点選抜群	133	509	3.8	4.0	350				2.6				
			物理重点選抜群	239	618	2.6	4.0	707				3.0				
			化学重点選抜群	240	580	2.4	4.0	569				2.4				
			生物重点選抜群	169	413	2.4	4.0	411				2.4				
			総合科学選抜群	253	536	2.1	4.0	616				2.4				
	計	1,034	2,656	2.6		2,653	2.6									
	学部別入試	文学部	118	371	3.1	4.0	295	2.5								
		教育学部	20	47	2.4	4.0	46	2.3								
		法学部	140	304	2.2	4.0	327	2.3								
		経済学部	140	341	2.4	4.0	346	2.5								
		医学部	保健学科	医学科	85	298	3.5	3.5				295	3.5	4	89	3.3
				看護学専攻	60	103	1.7	5.0				133	2.2	7	67	1.5
				放射線技術科学専攻	28	67	2.4	5.0				119	4.3	6	34	2.0
				検査技術科学専攻	25	75	3.0	5.0				78	3.1	10	35	2.1
理学療法学専攻				13	52	4.0	5.0	44	3.4	2	15	3.5				
作業療法学専攻				10	34	3.4	5.0	30	3.0	5	15	2.3				
小計				136	331	2.4		404	3.0	30	166	2.0				
計		221	629	2.8		699	3.2	34	255	2.5						
歯学部		38	154	4.1	6.0	123	3.2	4	42	3.7						
獣医学部		20	90	4.5	6.0	93	4.7									
水産学部	105	312	3.0	4.0	284	2.7	11	116	2.7							
合計	1,931	5,248	2.7		5,196	2.7	49	1,980	2.7							
後期日程	学部別入試	文学部	37	380	10.3	6.0	356	9.6	/							
		教育学部	10	79	7.9	10.0	79	7.9								
		法学部	40	430	10.8	6.0	476	11.9								
		経済学部	20	189	9.5	10.0	236	11.8								
		理学部	数学科	10	142	14.2	6.0	134				13.4				
			物理学科	3	99	33.0	6.0	81				27.0	6	9	11.0	
			化学科	20	188	9.4	6.0	173				8.7				
			生物科学科 生物学専修分野	10	71	7.1	6.0	108				10.8				
			生物科学科 高分子機能学専修分野	2	19	9.5	6.0	24				12.0				
			地球惑星科学科	5	81	16.2	6.0	93				18.6	2	7	11.6	
		計	50	600	12.0		613	12.3				8	58	10.3		
		薬学部	24	382	15.9	6.0	232	9.7								
		工学部	応用理工系学科	29	241	8.3		246				8.5	2	31	7.8	
			情報エレクトロニクス学科	38	364	9.6		381				10.0				
			機械知能工学科	25	160	6.4		291				11.6				
			環境社会工学科	47	375	8.0		468				10.0	2	49	7.7	
			計	139	1,140	8.2		1,386				10.0	4	143	8.0	
農学部	53	451	8.5	6.0	400	7.5										
獣医学部	15	108	7.2	6.0	115	7.7										
水産学部	50	399	8.0	6.0	393	7.9										
合計	438	4,158	9.5		4,286	9.8	12	450	9.2							
総計	2,369	9,406	4.0		9,482	4.0	61	2,430	3.9							

注1: 「倍率」は、小数第2位を四捨五入。

注2: 「第1段階選抜予告倍率」は、当初募集人員に対するもの。

フロンティア入試Type I 最終合格者の発表

令和7年度フロンティア入試Type I の最終合格者発表が2月12日（水）に行われ、23名が合格しました。

(学務部入試課)

令和7年度フロンティア入試最終合格者数等一覧

学部・学科等		募集人員	志願者数	倍率	第2次選考合格者数	最終合格者数	
Type I	理学部地球惑星科学科	5	20 (2)	4.0	4 (0)	3 (0)	
	医学部 保健学科	医学科	5	17 (3)	3.4	1 (1)	1 (1)
		看護学専攻	7	15 (7)	2.1	2 (0)	0 (0)
		放射線技術科学専攻	7	8 (4)	1.1	2 (2)	1 (1)
		検査技術科学専攻	10	6 (4)	0.6	3 (2)	0 (0)
		理学療法学専攻	4	9 (2)	2.3	4 (0)	2 (0)
		作業療法学専攻	7	4 (1)	0.6	2 (0)	2 (0)
	歯学部	5	8 (4)	1.6	5 (1)	1 (0)	
	工学部	応用理工系学科 (応用マテリアル工学コース)	4	5 (3)	1.3	5 (3)	2 (1)
		環境社会工学科 (社会基盤学コース)	4	11 (5)	2.8	4 (2)	2 (1)
水産学部	20	56 (4)	2.8	20 (1)	9 (1)		
小計		78	159 (39)	2.0	52 (12)	23 (5)	
Type II	理学部	数学科	13	51 (32)	3.9	13 (8)	13 (8)
		物理学科	14	36 (10)	2.6	8 (4)	8 (4)
		化学科	11	20 (9)	1.8	11 (5)	11 (5)
		生物科学科 (高分子機能学専修分野)	3	6 (3)	2.0	3 (2)	3 (2)
	工学部	応用理工系学科 (応用物理工学コース)	15	65 (26)	4.3	15 (4)	15 (4)
		機械知能工学科	5	15 (10)	3.0	5 (4)	5 (4)
		環境社会工学科 (環境工学コース)	5	30 (8)	6.0	5 (1)	5 (1)
小計		66	223 (98)	3.4	60 (28)	60 (28)	
計		144	382 (137)	2.7	112 (40)	83 (33)	

※ () 内の数字は、道内高校出身者で内数。

国際総合入試合格者の発表

令和7年度国際総合入試のうち、条件付合格者（国際バカロレア資格の取得を条件として合格していた者）の最終合格発表が2月12日（水）に行われ、14名が合格しました。

昨年12月10日（火）に発表された合格者と合わせ、最終合格者は15名となりました。

(学務部入試課)

令和7年度国際総合入試合格者数等一覧

学部・学科等		募集人員	志願者数	倍率	合格者数 (条件付合格者含む)	最終合格者数
総合入試	文系	5	16 (12)	3.2	5 (4) [5 (4)]	5 (4)
	理系	10	31 (17)	3.1	10 (7) [9 (6)]	10 (7)
計		15	47 (29)	3.1	15 (11) [14 (10)]	15 (11)

※ () 内の数字は、女子で内数。

※ [] 内の数字は、条件付合格者数で内数。

現代日本学プログラム課程 「ゲストレクチャー・ワークショップシリーズ」を開催

現代日本学プログラム課程（現プロ）では、令和6年度2学期に、対面による「ゲストレクチャー・ワークショップシリーズ」を開催しました。

本シリーズは、学内外の日本研究の専門家を招き、現代日本学の最先端について英語で学ぶことを目的とし、主に現プロ学生を対象として開催してい

ます。前学期に引き続き石見 禎講師（高等教育推進機構国際教育研究部・現代日本学ユニット）がコーディネーターとなり、日本研究をテーマとして、多彩な講師による講演を9回にわたり実施しました。学内から延べ人数200名以上が出席し、現代日本学の諸相を学びました。

現プロでは令和7年度以降も、現プロ学生のみならず、学内外からの参加者の現代日本への学びをさらに深め実学の涵養を目指し、より一層魅力的なゲストレクチャー及びワークショップを実施する予定です。

（学務部教育推進課）

講演内容及び登壇者（一部抜粋）

- ・ 10月18日（金）「Enjoy Your Japanese Tea: Japanese tea as healthy drink and the efficient key for good cultural communication」
大森由美子代表取締役（大森園株式会社）
- ・ 10月23日（水）「Exploring Security Cooperation between Japan and its Partners in the Indo-Pacific region」
ルーベン・アジジアン教授（マッセイ大学）
- ・ 10月23日（水）・24日（木）
「Re-Rising Japan: An Institutional Realist Perspective」
佐藤洋一郎教授（立命館アジア太平洋大学）
- ・ 11月 1日（金）「Beyond Slavery: A Post-Turing Typology of Human-Technology Relationships」
グラント・ジュン・オオツキ准教授（東京大学）
- ・ 11月29日（金）Lecture 「WFP's Humanitarian Activities in Myanmar and Japan's Contribution」
11月30日（土）Workshop 「WFP's Project Management: Emergency Food Assistance - Flood Response」
近藤篤史事務所長（国連世界食糧計画ラカイン事務所）
- ・ 1月17日（金）「Prescription for a Super-Aged Society: Team Care, Integrated Medical and Care System and Community Revitalization」
大蔵 暢院長（やまと在宅診療所 白石）



大森代表取締役による講演



近藤事務所長による講演

キャリアセンター主催「ファイターズスポーツ&エンターテイメント 社員協力 グループワーク実践講座」を開催

1月11日（土）、キャリアセンター主催「ファイターズスポーツ&エンターテイメント社員協力 グループワーク実践講座」を開催しました。

「ファイターズスポーツ&エンターテイメントのインターンシップを企画する」という課題に対し、学生はグループに分かれて話し合い、発表を行いました。まず企業理解を深めるために、参加学生全員に向けて、株式会社ファイターズスポーツ&エンターテイメントの古川拓実氏より、会社説明を行っていただきました。その後、学生は各グループに分かれ、インターンシップを企画する上で必要な情報を得るために、各グループに入っていた社員の方々に対してインタビュー

を行いました。

質問内容や、話す人・記録などの役割分担はグループ毎でインタビュー前に話し合い、30分間と決められた時間の中で多くの情報を得ようと積極的に質問をしていました。

プレゼンテーション発表では、学生は社員の方々を前に緊張しながらも、グループで話し合った内容について発表を行いました。

発表後はインタビューに協力してくださった社員の方々からフィードバックをもらい、企画立案の流れや、決められた時間の中でグループで成果を出すために必要なことなどを学んでいました。

学生へのフィードバック後は、座談

会を行いました。本学OB・OGの社員の方にも参加していただいております、卒業後のキャリアや就職活動についてなどの質問も出ていました。

参加した学生からは「社員の方からのフィードバックを通じて、実際に働いている方の目線を実感することができた」「インターンシップの疑似体験を経験することができた」「社員の方々から熱量を感じ、自分も情熱を持って働きたいと思った」など多くの気付きを得られたとのコメントがありました。

（キャリアセンター）

日 時：2025年1月11日（土）13:00～18:00

会 場：高等教育推進機構S棟1階（すべて対面で実施）

対 象：本学学生

主 催：北海道大学キャリアセンター

協 力：株式会社ファイターズスポーツ&エンターテイメント



会場の様子



学生に会社説明を行う古川氏



プレゼンテーション発表の様子



優勝したグループの学生とインタビューに協力くださった社員の方々との記念撮影

朴 喆熙駐日大韓民国特命全権大使による講演会を開催

12月18日（水）、朴 喆熙（パク・ Cholヒ）駐日大韓民国特命全権大使をお迎えし、人文・社会科学総合教育研究棟にて、「来年の国交正常化60周年を迎えての韓日関係」をテーマに講演会を開催し、本学教職員及び新渡戸カレッジ生等の学生が参加しました。

講演会では、公共政策学連携研究部の池 炫周教授による朴大使の紹介の後、朴大使から、日本と韓国の安全保

障面、経済面での連携について、また高齢化や少子化、労働力不足といった昨今の社会的課題への対応、各国の開発を支援するために日本と韓国が協力していくことの重要性などについて話がありました。続いて参加者から「国際情勢が変化する中の韓国国内の対日政策」「領土問題などの歴史認識」「自治体同士の連携」などについて多くの質問があり、意見交換が行われま

した。また朴大使からは、一度は韓国に来てほしいとの言葉がありました。

講演会の前には高橋 彩理事・副学長との懇談が行われ、両国の今後の交流に関する意見交換が行われました。

（公共政策学連携研究部、
国際部国際連携課）



朴大使による講演



司会を務めた池教授



高橋理事・副学長とのギフト交換

函館市と包括連携協定を締結

本学と函館市は、本学が有する知見と函館市による地域づくりとが連携することにより、相互に協力・発展しながら、地域課題や社会課題の解決に寄与していくことを目的として、包括連携協定を令和7年1月31日付で締結しました。

包括連携協定に基づく連携・協力内容は以下のとおりです。

- (1) 産学官連携による地域活性化に関する事項
- (2) 地域の未来を担う人材育成に関する事項
- (3) 大学の知見及び地域づくりの連携による付加価値の創造に関する事項
- (4) SDGsの推進に関する事項

本学は、この協定に基づき、函館市と緊密に連携し、社会・地域の課題解決に向けてより一層取り組んでまいります。

(社会共創部社会連携課)



函館市役所で行われた包括連携協定の締結式。
左から函館市の大泉 潤市長、本学の實金清博総長

北海道大学創基150周年記念募金（北大フロンティア基金）

北海道大学は、創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に北大フロンティア基金を創設しました。

奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、息の長い募金活動をする事としています。

2026年、北海道大学は創基150周年を迎えます。次の150年を見据えた記念事業のため、2023～2026年度の4年間、北大フロンティア基金は「創基150周年記念募金」として、皆様からのご寄附を募集しております。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金創設時累計	(12月31日現在) / 52,412件	7,769,319,336円
うち、北海道大学創基150周年記念募金累計	(12月31日現在) / 15,364件	1,604,550,779円

<ご寄附状況>

12月は946件100,906,627円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいている方々のご芳名を掲載させていただきます。

(五十音別・敬称略)

寄附者ご芳名（法人等）

株式会社育伸社、応用地質株式会社、医療法人社団おびひろアート矯正歯科、共和コンクリート工業株式会社、株式会社グランビスタホテル&リゾート札幌グランドホテル、社会医療法人憲仁会、株式会社サポート、株式会社神鋼環境ソリューション、医療法人スワンアイクリニック、泉工医科工業株式会社、医療法人社団くわのみ会桑園整形外科、株式会社ターフテック、大成建設株式会社札幌支店北大卒業生一同、株式会社バイタル、北海道大学パイプオルガン研究会、北海道-ワインプラットフォーム事務局

寄附者ご芳名（個人）

合川 正幸	青井 良平	青木 俊介	青野 志郎	明石 航永	赤平 幸郎	上石 幸大	浅川昭一郎
浅沼 佳南	渥美 達也	阿部 雅史	池田 孝	石井 哲夫	石井 紀夫	石岡 克己	石垣 隆弘
石川 秀敏	石橋 寛久	磯野 裕一	伊藤 清顕	伊藤 修司	伊藤 雄三	井戸川静夫	井上 将希
猪股 路子	井原 教博	今井 晋	今村 大輔	入澤 秀次	岩下 明裕	上田 雅敏	植村 泰雄
宇仁 義和	梅本 由佳	縁記 和也	遠藤 公憲	遠藤 陽三	大城 砂織	太田 晴也	太田 裕之
太田 正敏	大田 光仁	大原 正範	大森 茂伸	小笠原正明	岡田 英子	沖崎 遼	奥野 和弘
小熊 豊	奥山みなみ	尾崎 毅	小田原一史	小原 大和	加藤 伸康	金川 眞行	金田 亮平
亀岡 優人	川端 昭次	河本 充司	菊地 誠	岸 利男	衣川 暢子	木村 恭子	木村 清延
木村 重夫	木村 幸文	倉持 壽夫	栗原 誠治	栗原己貴子	黒木 俊宏	黒田 敏	上月 浩
小助川貞次	後藤 隆之	小林 賢人	小松 憲次	近 祐次郎	今野 哲	財津 勲	齊藤 晋
齋藤 久	齋藤 恵	坂口 慧	坂田 隆	坂本 大介	坂本 信行	崎元 大志	笹山ひとみ
貞神 喜秋	佐藤 千尋	佐藤 俊哉	佐藤 久聡	佐藤 文保	佐藤 恵	佐野 公昭	三升畑元基
三分一博基	志瀆 聡子	志田 佳郎	柴野 将恵	渋谷 繁男	渋谷 正人	島谷 淳子	清水 研一
庄司周一郎	白尾 誠二	神保 重孝	菅原 新也	杉江 和男	杉元 紘一	杉山 隆文	鈴木 泉
鈴木 幸江	鈴木 孝敏	鈴木 貴之	鈴木 健之	鈴木 充	スリヤニチサシャ	瀬川 章	瀬名波栄潤
瀬沼 宏章	高瀬登志彦	高田 祥之	高橋 和美	高橋 幸孝	高柳 涼	田栗 和奈	竹内 学
館田 英喜	田中 佐織	田中 利男	谷口 誠	玉谷 青史	田村多喜志	田村 悠	辻井 正久
土家 琢磨	寺澤 陸	富田 好克	豊田 威信	鳥山 麻央	長尾 輝彦	中田 靖子	中町 昭道
中村 和正	中屋 耕	行木 慎一	西田 和代	根本 叔治	野村 修一	花田 秀一	花村久美子
林 美香子	原 啓介	原田 武雄	日沖 勲	久田 敦史	平澤 雅子	平山 浩一	廣重 勝彦

福井 独歩	福井 伸明	福永 悟郎	藤澤 裕子	藤瀬 智雄	藤田 禎三	藤田 正隆	藤田 芳康
藤見 峰彦	藤森 俊介	古川夕里香	古野千津子	別所 智博	逸見 勝亮	松井 彰	松井 耕二
松澤 重治	松田 裕明	松橋 朗	松原 謙一	松本 剛	真屋 幹雄	三木 證永	三橋 剛
南 達哉	南田 大朗	三原 州人	宮田 信幸	宮地 知子	三好 憲一	村 政幸	村井 英樹
村上 広輝	村島 生祐	村瀬徳啓充	村瀬 亮太	矢久保和男	矢久保ゆかり	八島 セツ	山内 康嗣
山口 恵子	山下 徹郎	山田 知充	山田 剛弘	山本勝太郎	山本 聡	山本 芳輝	湯川 正雄
横山 考	吉岡 成人	吉田 和浩	吉田 広志	吉田みなし	奥那覇 俊	米澤 功至	若狭 哲
和田 麻理	渡邊 奈美						

<寄附者への特典>

創基150周年を記念した銘板

創基150周年を記念した銘板をご用意しました。銘板は、これまでのご寄附累計金額をもとに、本学総合博物館に掲出させていただきます。個人・法人共に、ご寄附の累計が1億円以上でプレミアムゴールド、1千万円以上でゴールド、500万円以上でシルバー、100万円以上でブロンズとなります。

既存のホワイト銘板は累計20万円以上が対象です（令和2年度以前は総合博物館、令和3年度以降は百年記念会館に掲出）。なお、銘板については、年度内に賜ったご寄附の累計を取りまとめ後、翌年度9月頃を目途に掲出いたします。

※このほか、ご寄附の金額に応じ、オリジナルグッズや感謝状の贈呈、御礼の場など様々な特典をご用意させていただきます（詳細はこちらでご確認ください <https://www.hokudai.ac.jp/fund/gratitude/>）

<感謝状の贈呈>



ワタキューセイモア株式会社様（令和6年12月9日）



山下裕久様（令和6年12月12日）



大出孝博様（令和6年12月16日）



小林清一様（令和6年12月18日）



公益財団法人杉野目記念会様（令和6年12月24日）

ご寄附のお申し込み方法

北大フロンティア基金ホームページの「教職員からの寄附」にアクセスしてください。

<https://www.hokudai.ac.jp/fund/howto-staff/>

①給与口座からの引き落とし

ホームページから「北大フロンティア基金申込書（給与口座からの引落）」をダウンロードし、ご記入の上、卒業生・基金室 基金事務担当に提出してください。

②郵便局または銀行への振り込み

卒業生・基金室 基金事務担当にご連絡ください。払込取扱票をお送りします。

③現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、卒業生・基金室 基金事務担当までご持参ください。

申込書は、ホームページから「北大フロンティア基金申込書（教職員現金用）」をダウンロードしてご記入いただくか、卒業生・基金室 基金事務担当にもご用意していますので、お越しただいてからご記入いただくことも可能です。

④クレジットカード決済・コンビニ決済・PayPayでのご寄附

北大フロンティア基金ホームページ

(<https://www.hokudai.ac.jp/cgi-bin/fund/bin/xRegist.cgi>) の寄附申し込みフォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 卒業生・基金室 基金事務担当（事務局・学内電話 2017）

令和6年度第4回北海道大学技術職員横断連携体験実習を実施

11月7日（木）、8日（金）の2日間、北方生物圏フィールド科学センター（以下、FSC）七飯淡水実験所にて、令和6年度第4回北海道大学技術職員横断連携体験実習を実施しました。本実習は、北大コアファシリティ構想研究支援人材育成プログラム、マルチスキル人材育成プロジェクト事業の一環として実施したものであり、異なる職場の業務体験等を通して幅広い視野を養い、分野を超えた横のつながりを醸成することを目的としています。

七飯淡水実験所は、サケ・マスを中心に飼育し、研究教育で活発に利用されている施設で、工学研究院、FSCから計4名の若手技術職員が参加し、1日半の実習を受けました。初日はFSCの萩原聖士准教授による施設紹介・見学の後、阿達大輔技術専門職員と高橋英佑技術専門職員の指導のもと、魚の選別作業を行いました。繁殖のため、親魚候補を残す作業で、屋外飼育池の水位を下げた後、サクラマス、ニジマス、イトウ、カワマス等を一旦網で掬

い、体の模様や大きさ等を目安にして振り分けました。

選別後は、親魚候補外の魚から各人1匹を選び、出荷前の前処理を体験しました。脳打ち（ピックを使い、魚を即死させること）、血抜き、神経の切断後、内臓やえらを取り除く一連の工程で、魚の鮮度を保つための大事な作業です。初めての作業にためらう様子も見られましたが、分かりやすくポイントを教えてもらいながら作業を進めました。脳打ち後、巨大なクーラーボックス一杯になった魚は、飼育しているイトウやチョウザメの餌にするため、全員でぶつ切りにしましたが、時間内に作業を完了することはできず、普段は少人数でこれらの作業をどうしているのか、参加者は気になっていました。初日の最後は、萩原准教授による魚の養殖に関する講義でした。ウナギの話題など、普段の食にもつながる興味深い内容で、専門が全く異なる参加者達も熱心に聴講し、質問をする姿が見られました。

2日目は、まずブラウントラウトの採卵・採精を見学後、ニジマスを使用し同じ作業を行いました。飼育池から網で魚を掬い取り、腹部の感触で適したものを選びます。魚が大きく、また動くため、採卵・採精作業は複数人で協力して行いました。高橋技術専門職員による受精の実演を見学後、参加者は死卵や不純物の除去作業、受精卵を培養するための孵化槽の洗浄作業を行い、実習を終えました。

参加者からは「オリジナルの養殖設備があり、技術職員のやるべき仕事を見られてよかった」との声がありましたが、施設内には、開発した技術職員の名を冠した形式の水槽や、技術職員が自ら工夫し施工した設備が見られ、サケ・マスの繁殖に関して持っている高い技術と合わせ、本実験所における技術職員の存在の大きさを感じた実習となりました。

（技術支援本部）



萩原准教授（左端）による施設紹介



餌化作業



ニジマスの採卵作業



実験所職員と参加者

総合イノベーション創発機構オープンセレモニーを挙

1月20日(月)に、総合イノベーション創発機構(英名: Institute for Integrated Innovations。通称: I³(アイキューブ))の発足を記念したオープンセレモニーを創成科学研究棟で挙

行しました。総合イノベーション創発機構は、令和7年1月1日に前身組織である創成研究機構を発展的に改組した組織で、ユニークかつ独創的な分野融合研究を通じた新たな研究領域の開拓やイノベーションの創出、民間企業や自治体との協働による社会課題の解決、グローバルな課題解決に資するための国際研究連携等へ、本学の研究支援組織が連携して支援にあたるなど、学内リソースの集中的な投下によるアジャイル型の運営組織です。

新たに内部組織として設置した

J-PEAKS企画・運営室は、本学の研究力強化を推進するとともに、特に「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業(J-PEAKS)」において注力すべき研究ユニット等に対して、本学の研究支援組織が連携して、研究の企画から社会への実装までを継続的に推進及び支援することを目的としています。

オープンセレモニーには、寶金清博総長をはじめ、機構長の瀬戸口剛理事・副学長、副機構長の西邑隆徳副学長、阿部 弘副理事、及び長谷川淳也教授、並びに総合イノベーション創発機構運営委員会委員らの関係者に加え、本機構の各研究拠点や触媒科学研究所、電子科学研究所、統合URA本部等の教職員が参列しました。

はじめに、寶金総長から挨拶があ

り、本機構が創成研究機構のミッションステートメントを継承しつつ、活動を通して、持続可能なWell-being社会の実現に貢献するとともに、将来的には、国際卓越研究大学に並び立つ世界レベルの「Excellence」と、農学や水産学を中心とした本学ならではのフィールドサイエンスの優位性により、北海道と世界の課題解決に貢献する「Extension」の二つの要素が相互に成長し合うエコシステムを構築することにより、世界の課題解決に貢献することを宣言されました。

その後、参列者により新しい銘板を掲げて集合写真の撮影を行い、閉会となりました。

(総合イノベーション創発機構)



寶金総長による挨拶



参列者集合写真

第1回北海道大学統合技術連携シンポジウムを開催

第1回北海道大学統合技術連携シンポジウムは、「共用概念の拡張から大学の未来を考える ―学術研究と高等教育の持続的発展を目指して―」をテーマとして、1月17日（金）に技術支援・設備共用コアステーション（以下、CoSMOS）の主催、総合イノベーション創発機構グローバルファシリティセンター（以下、GFC）及び技術支援本部の協賛にて、ハイブリッド形式で開催されました。参加者数は現地61名、オンライン約70名でした。

はじめにGFCの網塚 浩センター長による挨拶及びシンポジウムの趣旨説明があり、続いて文部科学省科学技術・学術政策局研究環境課の野田浩絵課長より、「先端研究基盤の強化について」と題して基調講演が行われ、先端研究設備・機器の共用推進の現状と課題及び今後の方向性やコアファシリティ化の推進に関する報告が行われました。

次に、「北大の技術支援本部と技術職員のこれから」として、技術支援本部の井上 京副本部長より、新体制・技術連携統括本部（以下、ITeCH）について説明がなされました。

その後、「工学系技術センターの現状と課題 ―技術系統括本部ITeCHへの期待―」と題して工学研究院工学系技術センターの林 重成センター長より、「北方生物圏フィールド科学センターの技術職員体制について 多様なフィールド教育研究を支える技術集団」と題して北方生物圏フィールド科学センターの宮下和士センター長より、「教育・研究能力を強化するには『現場を強くする』こと ―現場の一翼を担う技術職員の視座から―」と題して技術支援本部の籠橋雄二アドバイザーより、それぞれ招待講演が行われました。

また、コアファシリティ活動報告として、CoSMOSの佐々木隆太研究基盤強化グループ長（GFC副センター長）から機器共用機能強化プログラムについて、同じくCoSMOSの岡 征子人材育成グループ長（GFC機器分析受託部門長）から研究支援人材育成プログラムについて報告が行われました。

次に、薬学研究院の森 綾子技術専門職員より「シミュレーターやVR動画を活用したオンライン実習プログラムの構築」と題してR&Tコラボプロ

ジェクトの報告が行われました。

続いて、GFCの中村晃輔試作ソリューション部門長より試作ソリューション事業報告が行われました。

その後、網塚センター長よりGFCの新体制について説明がなされました。

コーヒープレーク・ポスターセッションの後に行われたパネルディスカッションでは、網塚センター長による進行のもと、講演者に加えて、技術支援本部長を務める行松泰弘理事をパネリストに迎え、「共用概念の拡張から大学の未来を考える ―学術研究と高等教育の持続的発展を目指して―」をテーマに活発な討論が行われました。最後に、行松理事による閉会の辞で、盛況のうちに終了となりました。

閉会後に実施したアンケートの回答によると、技術職員組織の現状と課題に関する講演やコアファシリティ事業を通じた実際の取り組みに関する報告に反響があったことが分かり、今後の取り組みに対する期待、情報・課題の共有及び情報発信の重要性がうかがえました。

（総合イノベーション創発機構）



シンポジウム会場の様子



パネルディスカッションの様子

「北海道大学・NTT・NTT東日本との連携プログラム協議会及び技術交流会」を実施

産学・地域協働推進機構は、日本電信電話株式会社（以下、NTT）、東日本電信電話株式会社（以下、NTT東日本）と12月6日（金）にホテルモントレエーデルホフ札幌にて「連携プログラム協議会」及び「北海道大学－NTT技術交流会」を開催しました。

本協議会は、産学の連携を通して科学技術の向上及び人材の育成に資することを目的として、三者で締結している「連携プログラムの実施に関する協定」に基づき、相互に密接な連携・協力関係の維持・発展のために定期的に開催しており、今回で15回目となります。

同協議会では、近年の本学とNTT及びNTT東日本との共同研究の実績や交流のトピック、また次年度も協定を継

続する旨を確認した他、NTTの研究者より、現在進められている研究に関する報告がありました。瀬戸口剛理事・副学長からは「本学の広大なフィールドを、NTTの強みである通信技術の実証実験に活用していただきたい」との意見が出るなど、活発な議論がなされ、今後も引き続き連携を深めていくことが確認されました。

その後、同会場にて、NTTの川添雄彦代表取締役副社長、寶金清博総長の他、本学教員17名、NTT研究者13名等を加えた総勢約60名により「技術交流会」を開催しました。本交流会は、NTT技術者と本学教員をマッチングするため、コロナ禍以降、5年ぶりに開催されたものであり、今回は交流テーマをGX（グリーン・トランスフォーメー

ション）と位置付け、同テーマに関連の深い教員・研究者が参加しました。

川添副社長からは、「研究者マッチングによる北大・NTTの新たな関係構築への期待」、寶金総長からは、「IOWN（NTTが進める次世代ネットワーク構想）や次世代半導体でグローバルに競争していかなければならない」といった相互を鼓舞されるスピーチがある等、終始、研究者同士がリラックスした良い雰囲気でも語り合える場となりました。

今後も、研究成果の社会実装に向けた産学協働を推進すべく、このような取り組みを継続的に実施してまいります。

（産学・地域協働推進機構）



連携プログラム協議会の様子



技術交流会でスピーチする川添副社長



技術交流会での川添副社長（右）と寶金総長（左）



技術交流会の様子

JICAモンゴル事務所と連携し、インターンシップ・プログラムを実施

産学・地域協働推進機構は12月7日（土）から12月9日（月）に、国際的に活躍する「グローバルアントレプレナー」の育成を目的に、独立行政法人国際協力機構（以下、JICA）と連携し、モンゴルにてインターンシップ・プログラムを実施しました。本プログラムには学部生から博士後期課程の学生まで、本学学生9名が参加し、モンゴルで開催されたビジネスコンテストの出場や、現地のスタートアップ企業等の訪問、フィールドワークを行いました。

ビジネスコンテスト「DXCUP2024-winter」には、本学学生チーム3組（7名）が出場しました。自身の活動や研究内容を活用したビジネスアイデアを発表し、うち1チームが日本チーム初の入賞となる3位入賞を果たしました。また、JICAモンゴル事務所や現地のスタートアップ企業等を訪問し、意見交換を行い、現地の課題や取り組みへの理解を深めました。豊かな歴史的背景を持つモンゴルには、日本とは異なる文化が数多くあり、異文化に触れる貴重な経験にもなりました。

参加した学生からは、「モンゴルの学生のピッチは勢いがあり、発表やアピールの方法が非常に参考になった」「モンゴルならではの社会課題やテクノロジーに触れることができ、刺激的だった」「自分たちのビジネスアイデアが認められ、大きな自信となった」といった声が寄せられ、今後の活動に生かすことができるプログラムとなりました。

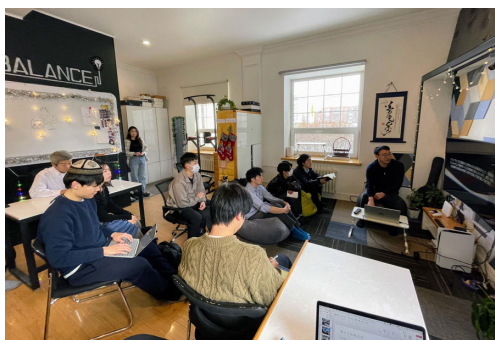
（産学・地域協働推進機構）

実施内容

- 日程：12月7日（土）～9日（月）
- 内容：JICAモンゴル事務所との連携インターンシップ・プログラム
- 参加者：本学学生9名
- 運営：産学・地域協働推進機構、JICAモンゴル事務所
- 協力：大学院教育推進機構



DXCUP表彰の様子



モンゴルのスタートアップ企業訪問の様子



モンゴルのスタートアップ企業にて職員とディスカッションする様子



集合写真

産学・地域協働推進機構が「みどりのワークショップ」を開催

産学・地域協働推進機構は12月17日（火）に、農林水産省北海道農政事務所（以下、北海道農政事務所）との共催により、「みどりのワークショップ」のキックオフイベントを、株式会社HBA協賛のもと、HBA創成イノベティブオフィスで開催しました。

本ワークショップは、農林水産省が我が国の食料・農林水産業の生産力向上と持続性の両立をイノベーションで実現することを目的として策定した

「みどりの食料システム戦略」の理解を深め、学生の主体的な活動の創発と支援を促すことを目標とした継続的な取り組みです。今回実施したキックオフイベントは、北海道農政事務所、本学の学生、株式会社HBAが参加し、北海道農政事務所からは「みどりの食料システム戦略」に係る現状の課題や今後の目指すべき目標・方向性についての講義がありました。その後、学生からは取り組んでいる活動について、

株式会社HBAからは環境負荷を減らすための取り組みについての紹介があり、これらを踏まえ、それぞれの立場から活発な意見交換が行われました。

産学・地域協働推進機構は今後も産官学の連携を強め、学生の興味関心に基づいた主体的な活動を促進することでアントレプレナーシップの涵養を進めてまいります。

（産学・地域協働推進機構）

実施内容

日時：12月17日（火）17:30～20:00

会場：株式会社HBA 創成イノベティブオフィス

参加：本学学生、北海道農政事務所、株式会社HBA（計30名）



北海道農政事務所による講義



学生の取り組み紹介

体験型ワークショップイベント 「メタバース×AIは人の暮らしに何をもたらすのか」を開催

産学・地域協働推進機構は12月20日（金）に、「次世代社会インフラとなる世界創造“メタバース”×人間拡張“AI・デジタルヒューマン”」の社会実装を目的に、メタバースやAIへの理解を深め、北海道における地域活性化に向けた様々な可能性を模索する体験型ワークショップイベント「メタバース×AIは人の暮らしに何をもたらすのか」を、一般社団法人メタバース推進協議会、株式会社Edifyとの共催で実施しました。

第1部では、国内のVR研究の第一人者である東京大学の廣瀬通孝名誉教授と、新潟県三条市の上田泰成副市長の

対談が行われたほか、5名の方が講演を行いました。第2部では、企業5社の協力のもと、メタバースやAIを活用したオフィス、バーチャル旅行などの体験会を実施しました。第3部では、「地域のXR^{*1}人材をどのように育成していくか」をテーマとし、本学学生、北海道内の企業、東京都内の大手企業、自治体関係者などの参加者が混合チームとなり、アイデアや意見を交わし合うアイデアソンを行いました。

参加者からは、「最先端の技術を学ぶことができ、非常に刺激になった」「このようにAIやメタバースなどについて学ぶ機会を学内でもっと増やして

ほしい」といった声が寄せられ、体験から次の学びに繋がるイベントとなりました。

産学・地域協働推進機構は引き続き、学生たちが地域や社会と連携しながら成長できる場を提供し、次世代を担う人材の育成に取り組んでまいります。

*1 XR … クロスリアリティ。現実世界と仮想世界を融合させて新しい体験を創造する技術の総称。

（産学・地域協働推進機構）

実施内容

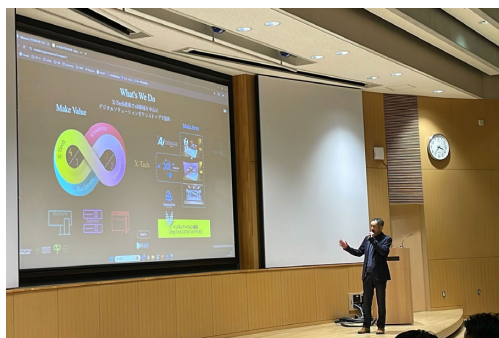
日時：12月20日（金）15:00～18:30

会場：フード&メディカルイノベーション国際拠点（FMI）

参加者：学生、企業、自治体関係者 約100名（オンライン参加含む）

共催：一般社団法人メタバース推進協議会、株式会社Edify

協力：株式会社NTTデータ、大日本印刷株式会社、パーソルマーケティング株式会社、ANA NEO株式会社、株式会社NTTデータNJK



第1部の講演会の様子



第2部の体験会の様子



第3部のアイデアソンの様子

小中高生向け起業家育成リアル謎解きゲーム 「スタートアップシティからの挑戦状 in 北海道大学」を開催

産学・地域協働推進機構は12月22日（日）に、小中高生向け起業家育成リアル謎解きゲーム「スタートアップシティからの挑戦状 in 北海道大学」を開催しました。本イベントは、アントレプレナーシップ教育プログラムの一環として行い、ゲームを通じてマーケティング思考、課題解決能力、分析力を養い、起業家精神を育むことを目的としています。プレイヤーとなる参加者はチームで協力し合い、発展を目指す架空の街“スタートアップシティ”で、新たなカフェのオープンを目指します。最適な出店場所の検討、大手

ショッピングモールとの差別化、ターゲット顧客の設定等、リアルな経営課題をストーリー仕立てで体験し、謎を解きながら、お店の発展を目指しました。

本イベントは、産学・地域協働推進機構スタートアップ創出本部がスタートアップポップコーン株式会社と協力して行い、北海道では初開催となりました。小中高生66名が参加したほか、子どもたちのアイデアをまとめたり、行き詰まったときにヒントを出したりするなど、場を活性化させる重要なサポート役として大学生も参加しま

した。見学した保護者からは「始めは緊張していた様子だったが、スタッフや大学生に助けをもらいながら自分の意見も言っていた」「ゲームがただ楽しかったで終わらず、振り返りをする事で学びが深まったように感じた。親にも学びがあった」などの意見が寄せられました。

今後も若年層へのアントレプレナーシップ教育プログラムを実施すると共に、次世代を担う人材の育成に取り組んでまいります。

（産学・地域協働推進機構）

イベント実施内容

日 程：12月22日（日）

第1回 10:30～12:30（小学4年生～中学3年生対象）

第2回 14:00～16:00（中学1年生～高校3年生対象）

参加者数：第1回39名、第2回27名

会 場：オープンイノベーションハブ「エンレイソウ」



チームで挑戦



サポートする大学生



謎解きの様子



参加者の皆さん

第27回ソウル大学校－北海道大学ジョイントシンポジウムを開催

本学の戦略的国際連携先である韓国ソウル大学校（以下、SNU）との第27回ジョイントシンポジウムが、11月27日（水）、28日（木）の2日間、SNU冠岳キャンパスで開催されました。

SNUと本学によるジョイントシンポジウムは、初回開催の平成10年以来、毎年札幌とソウルで交互に開催しており、今年で27回目を迎えることができました。

本学からは高橋 彩理事・副学長をはじめ約50名の研究者及び学生がSNUを訪問し、SNUからは約60名の研究者及び学生が結集しました。11月27日（水）の午後から夜にかけて開催された同シンポジウムの全体会及びレセプションは、ソウル現地で11月としては観測史上最大の積雪に見舞われることとなりました。航空機の遅延、同校敷地内での交通規制などが行われ、複数の研究分科会メンバーが全体会に参加できない事態が発生したものの、分科会については無事に開催することがで

きました。

全体会では、SNU工学部及び同校未来戦略研究所のジェヨン・ユン教授が、シンポジウムのテーマ「持続可能な環境に向けた学際研究の推進（Promoting Transdisciplinary Research Towards Sustainable Environment）」に関連し、「気候危機の克服とカーボンニュートラルの達成における大学の役割」について基調講演を行い、地球規模課題である気候危機を克服するためには、カーボンニュートラル（Carbon Neutrality）の達成を目指すだけでなく、大学は、カーボンニュートラルな社会を支える技術と学術の基盤を構築する責任があり、大学同士の協力的な取組がこれまで以上に重要である旨が述べられました。

同シンポジウムに付随して開催された研究分科会の研究フィールドは、「医学」「応用化学」「保健科学」「エネルギー工学」「機械工学」「材料工学」「情報学」「教育学」「環境

科学（森林学）」と多岐にわたり、持続可能な環境に向けた学際的な取組に関する意識の高いものとなりました。

また、同シンポジウムの開催中、両大学執行部が会合を持ち、本学で来年開催予定の第28回シンポジウムに係る調整を行ったほか、SNUで最先端の学際的研究が行われているAI研究所（AIIS）などを視察しました。

シンポジウムの翌週には、両校の職員を相互派遣する職員交流が開催され、本学の学務部国際交流課及び同部学生支援課から2名が、SNUの国際部国際教育及び国際協力担当から3名が参加し、互いに職場訪問を行い、学生支援、学生交流プログラムや海外大学との連携交流等に係る様々な意見交換を通じて交流を深めました。

28回目のジョイントシンポジウムは、令和7年10月下旬から11月上旬にかけて本学で開催予定です。

（国際連携推進本部）



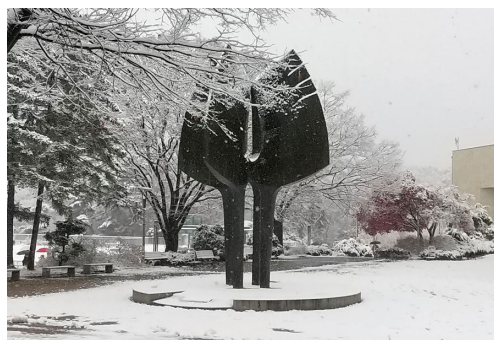
全体会で祝辞を述べる高橋理事・副学長



両大学執行部会合



高橋理事・副学長（左）とSNUのジェイ・ワ・リー副学長（右）



11月としては記録的な大雪に見舞われたSNUキャンパス（写真はキャンパス内の象徴的な造形物でもある2匹の鶴が翼を広げた姿を模したオブジェ）

分科会1

SNU-HU Joint Young Researchers' Symposium: Crossroads of Chemistry and Engineering for Sustainability

SNU-HU 若手研究者シンポジウム～持続可能性を目指して化学と工学の学際的連携～／工学研究院 准教授 荻野 勲

工学研究院応用化学部門から、菊地隆司教授、荻野 勲准教授、真栄城正寿准教授、山本拓矢准教授、永石新太郎助教、百合野大雅助教が研究分科会「若手研究者シンポジウム～持続可能性を目指して化学と工学の学際的連携～」に参加し、SNUの教員と意見交換を行いました。

今回は、両大学の若手研究者間の学術交流を促進することを目的とし、両大学の若手研究者が学際的研究に直接関与することで、当該分野において多角的な視点を保持し、持続的な交流を行うための基盤を構築することを目指したものとなりました。

学際的研究を促進するため、本分科

会セッションでは、化学及び化学工学における様々な分野の若手研究者による発表が行われました。両大学から、それぞれ4人の講演者が登壇し、全体で8件の発表が行われました。

(工学研究院)



約100年ぶりの大雪に見舞われたSNU内での分科会参加者集合写真

分科会2

High Temperature Nuclear Reactors for a Cool Earth

地球を冷やしてくれる高温ガス炉／工学研究院 助教 張 承賢

「地球を冷やしてくれる高温ガス炉」研究分科会セッションでは、高温ガス冷却炉（以下、HTGR）に焦点が当てられました。HTGRは、産業の脱炭素化とエネルギー安全保障の強化に向けて不可欠なものです。同分科会セッションでは、SNUと本学の若手研究者が、HTGRを含めた先進的な原子力

技術に関する研究を共有する場となりました。

同分科会セッションは11月28日（木）に行われ、翌日には、今後の研究協働の可能性について議論が交わされ、研究論文の共著、国際共同研究公募への応募、オンラインを含むワークショップの開催等について意見交換が行われ

ました。

日本と韓国はどちらもHTGR技術に強い関心を示しており、同分科会セッションは両大学間の学術研究協力を強化し、将来的な研究イニシアチブを促進することに貢献しました。

(工学研究院)



分科会参加者の集合写真

分科会3

The Potential of AI-Enhanced MRI and Nuclear Medicine: Contributions to Sustainability and the Environment

AIで進化するMRIと核医学の可能性：持続可能性と環境への貢献／医学研究院 教授 工藤與亮

27日（水）の全体セッションは、残念ながらソウル市内の記録的な大雪により中止となりましたが、28日（木）には、医学研究院画像診断学教室はSNU医学部放射線科のス・ホン・チュエ教授と共同で、MRIと核医学を軸とした研究分科会を開催しました。

今回のシンポジウムにより、SNUと本学の研究者の信頼関係を深めることができました。本教室は今後も、このシンポジウムへ継続的に参加していく予定です。令和7年にはこのシンポジウムは札幌で開催される予定であり、SNUの研究者を迎えて実りあるイベン

トが開催できるよう準備したいと考えています。

多くの参加者の皆様に感謝申し上げるとともに、次回のシンポジウムを楽しみにしています。

（医学研究院）



分科会参加者の集合写真

分科会4

Environmental Chemicals and Human Health

環境化学物質と人々の健康／環境健康科学研究教育センター 特任准教授 アイツバマイゆふ

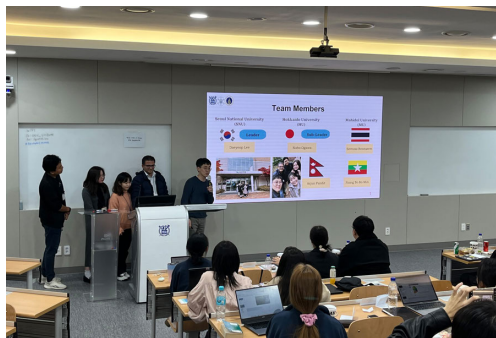
本分科会には、本学、SNU、及びタイのマヒドン大学に所属する教員8名、及び大学院生23名、学部生1名が参加しました。分科会の中で開催したSNUとの共同講義は、今回で9回目となります。環境と健康分野に関する基礎知識に加えて、最近の環境問題やその対策についても含め、幅広い知識を参加学生に習得させることができました。

また、環境保健、環境疫学の専門以外の視点を持つ質問や意見も出され、学生同士の異分野交流も深めることができました。共同講義では、担当教員及び学生同士の意見交換、共同発表のための資料作成及びプレゼンテーションが実施されました。参加者からのプレゼンテーションでは、今後の課題も提起されており、非常にクオリティが高いものでした。

さらに、フィールドワークでは、ソウル市のエネルギー・ドリーム・センターを訪問し、将来の環境保護に不可欠な、エネルギー効率の高い持続可能な建物に関することなどについて視察しました。エネルギー・ドリーム・センターの職員からは専門的な説明があり、学生と職員の間で活発な意見交換が実施されました。

共同講義を通じて本学の大学院生間のみならず、SNU及びマヒドン大学の大学院生との交流による将来のネットワークの形成にもつながり、参加者の今後のキャリア形成においても有益になることが期待されます。

（環境健康科学研究教育センター）



グループワークプレゼンテーションの様子

分科会5

Reshaping Roles and Skills of Educational Practitioners:
Rethinking 「教」 for the Future Generation and a Sustainable Society

教育専門職の役割とスキルに関する再構築：未来世代と持続可能な社会のための「教」に関する再考／高等教育推進機構 教授 江本理恵、助教 鄭 漢模、助教 田中孝平

SNU未来教育革新センター（代表：同センター長 イム・チョルイル教授）、本学高等教育推進機構高等教育研究部、大学院教育推進機構高等教育研修センター、産学・地域協働推進機構（代表：高等教育研究部 江本理恵教授）は、11月28日（木）にジョイントシンポジウム分科会を開催し、SNU側18名、本学側9名が参加しました。

両大学から各々6件の発表があり、教育現場におけるAIの利活用、アントレプレナーシップ教育、ファカルティ・ディベロップメント、教師へのサポートシステム等々、それぞれの教育実践に基づいた発表が行われました。当日の発表リストは、高等教育研究部のウェブサイトにてご参照いただけます。本分科会の成果として、両大学が抱える教育的課題に関して共通点を見出すことができたことがあげられます。両大学の参加者は、急変する両国の社会において、特に教育専門職の役

割や、教育専門職に対する社会からの期待もまた大きく変化していることに共感しました。このことを受け、今後もジョイントシンポジウムのような形を含め、学術的な交流を続けていくことを検討していく所存です。

本分科会が開催された日は、韓国の初雪としては117年ぶりの大雪で、本来予定していた会場までのアクセスができなくなりました。しかしホスト側のイム教授をはじめ、スタッフの皆様のおかげで、直前にアクセス可能な会

場に変更することができ、無事開催することができました。本分科会が無事開催できたこと、そして、両大学の研究者が集まり非常に有益な議論ができたことをとても嬉しく思います。参加して下さった皆様に感謝を申し上げるとともに、共通する教育的課題を抱える両大学が今後も交流を続けていけることを心から願っております。

(高等教育推進機構)



分科会参加者の集合写真

分科会6

Forests as a Nature-based Solutions for sustainable environments

持続可能な環境を目指した自然に基づく解決策 (NbS) としての森林の役割／北方生物圏フィールド科学センター 准教授 植竹 淳

本分科会のセッションテーマは、東アジアを代表する2つの学術機関であるSNUと本学の研究者と学生が、自然ベースのソリューションを効果的に導入することで、自然が提供する恩恵を最大化し、環境、社会、経済の問題を効果的に解決していくことを目指すものです。同分科会セッションでは、森林管理と動物、微生物を含む生物多様性の保全、生態系サービスを利用した水処理技術など、様々な分野の研究を共有し、持続可能な人間社会と環境のためにどのような学際的なアプローチが妥当であるか議論を行いました。

同分科会セッションでは、両国で持続可能な環境を実現するために、森林科学における地域協力を強化するため

の最新の情報、研究成果などが共有できました。

また、学生交流に関する議論も行われ、令和7年6月にSNUのNambu University Forestに本学の学生が、同年9月頃には本学の研究林にSNUの学

生がそれぞれ訪問する方針で調整が行われ、同交流の目的は、学術的な交流の基盤を築くことであると相互に確認できました。

(北方生物圏フィールド科学センター)



ワークショップの様子

分科会7

Development of construction materials for carbon neutrality and sustainability

カーボンニュートラルと持続可能性のための建設資材の開発に関するシンポジウム／工学研究院 准教授 胡桃澤清文

11月27日（水）にSNUにおいて、第27回SNU－北海道大学ジョイントシンポジウムの分科会として「カーボンニュートラルと持続可能性のための建設資材の開発に関するシンポジウム」を開催しました。

当日のソウルは11月としては大変珍しく大雪が降り、底冷えのする寒い1日となりました。SNU側代表者のジュヒョク・ムン教授、本学側代表者の胡

桃澤清文准教授が中心となり、教員と学生による口頭発表（SNU3件、釜山大学校1件、韓国建設技術研究院（以下、KICT）1件、本学4件）を準備し、両大学、釜山大学校及びKICTから約22名の参加者を得て盛況なシンポジウムとなりました。

建設資材のカーボンニュートラルにかかわる内容からその分析技術に関する内容に関して発表が行われ、活発な

議論が行われました。シンポジウム終了後には研究施設のラボツアーを行いました。SNUの研究施設は大変充実しており、最新の分析機器があり大変興味深いものでした。また、韓国ならではの昼食及び夕食を兼ねた懇親会を準備していただき、研究交流に加えて大いに親睦を深めることができました。

(工学研究院)



分科会参加者の集合写真

分科会8

2024 International Workshop on the New Frontiers in Convergence Science and Technology

複合科学技術の新たなフロンティア／情報科学研究院 教授 平田 拓

情報科学研究院はSNU側のカウンターパートであるGraduate School of Convergence Science and Technology（以下、GSCST）と分科会を開催しました。GSCSTは、複合領域（バイオ工学、情報科学、分子医学・薬学）を対象とする研究科です。今回は、情報科学研究院から菅原広剛准教授、宮原英之准教授、平田 拓教授の3名の教員と、情報科学院から7名の大学院生（情報エレクトロニクスコース6名、生体情報工学コース1名）が参加しました。

分科会（2024 International Workshop on New Frontiers in Convergence Science and Technology）は、11月28日（木）午後GSCSTのコンファレンスホールで開催されました。GSCSTのハワード・リー研究科長のご挨拶で分科会がスタートし、前半ではSNUの教員3名、本学の教員3名による講演を行

い、後半には本学とSNUの大学院生17名によるポスター発表を行いました。分科会の参加者は、本学の教員、大学院生に加えてSNUの教員6名、大学院生約17名でした。両大学の大学院生がポスターの前で積極的に話をしている様子が見られました。

分科会の後、双方の教員、大学院生が交流する機会が設けられ、それぞれの大学事情や国際交流について意見交

換しました。なお、今回の分科会開催には、ビッグデータとIoTに関する協同センター（CCB）のご支援をいただきました。次回のジョイントシンポジウムは本学での開催ですので、札幌での再会を約束して分科会の全ての行事を終えました。

(情報科学研究院)



大学院生によるポスター発表の様子

分科会9

Science Education for Sustainable Development: Preparing Educators for Global Challenges

2024 HU-SNU-NTNU-KU科学教育ジョイントシンポジウム 持続的発展のための科学教育：国際的課題に備える教育者／情報基盤センター・大学院教育推進機構オープンエデュケーションセンター 教授 重田勝介

本分科会は、平成20年の第11回北海道大学-SNUジョイントシンポジウムにおける分科会「ソウル大学校と北海道大学における教員養成・研修の比較研究」から始まり、コロナ禍による中断（令和3年及び同4年）はありましたが、継続して開催してきました。様々な研究領域の大学院生と教員が4大学（本学、SNU、台湾師範大学、カセサート大学）から集い、研究成果を発表し交流するための有効な場となってい

ます。

今年度のテーマは「持続的発展のための科学教育：国際的課題に備える教育者」です。基調講演においては、科学教育における認識論的アプローチの重要性や、アイトラッキング技術等を用いた教育手法の高度化、フィールドワークを通じたSTEM教育の提案などがなされました。また、各大学の教員と学生による口頭発表（34件）、ポスター

発表（17件）、ワークショップ（2件）でも活発な議論がなされました。ソウル市内の降雪のため、2日目の分科会はZoomによるオンライン開催に急遽変更されました。3日目のスタディツアーではSNU附属中学校・高校への視察が行われました。来年度の本分科会は台湾師範大学で開催する予定です。

（情報基盤センター、大学院教育推進機構オープンエデュケーションセンター）



分科会参加者の集合写真

分科会10

HU-SNU Joint Symposium on “Bioengineering toward Next Generation”

北大-SNUジョイントシンポジウム「次世代のバイオエンジニアリングへむけて」／工学研究院 教授 東藤正浩

11月27日（水）に「次世代のバイオエンジニアリングへむけて」と題し、機械・航空宇宙工学に関する分科会を開催しました。

SNU側代表者のエミー・キョンウォン・ハン教授、本学側の代表者として工学研究院の東藤正浩教授が中心となり、教員による口頭発表（SNU4件、本学3件）及び学生による発表（SNU・口頭発表4件、本学・オンライン発表4

件）を準備しました。

当日は大雪に見舞われる1日となりましたが、オンライン参加も含め、両大学から約30名の参加者を得て盛況な分科会となりました。午前から午後にかけて、生体医工学に関する基礎研究から、実用化段階の応用研究まで幅広い研究分野の発表が行われ、参加者は活発な議論と情報交換を行い、今後の研究活動の連携についても大いに可能性

を感じることでできる会となりました。準備していただいた昼食会では、雪景色を眺めながらこれまでの分科会の思い出話なども盛り上がり、研究交流に加えて大いに親睦を深めることができました。

（工学研究院）



分科会参加者の集合写真

職員交流

令和6年度北海道大学事務職員海外短期集中研修

令和6年度北海道大学事務職員海外短期集中研修が12月2日（月）から12月6日（金）に行われました。本研修は本学の戦略的国際連携先であるSNUとの第27回ジョイントシンポジウム職員交流事業の一環として、両大学の職員がそれぞれ相手大学を訪問し実際の現場を見学しながら、各部署の業務紹介、業務上の優れた取組や課題等を共有し、意見交換を行うものです。今年度は、SNU国際部から学生の海外派遣を担当するヒョンジュ・ペ職員、外国人留学生支援を担当するダイエ・キム職員、国際交流関係を担当するヘセ・シン職員の3名、本学からは学務部学生支援課奨学支援担当の佐藤彩乃係員と同部国際交流課派遣担当の安藤優記係員の2名が参加しました。

12月2日（月）、3日（火）は本学からの参加者がSNU冠岳キャンパスを訪れ、学生宿舎、中央図書館を見学した他、国際部を訪問しました。国際部で

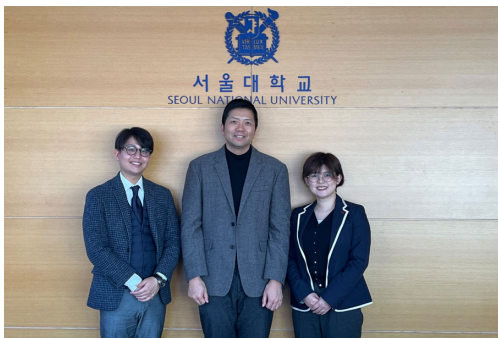
は、SNUでの外国人留学生向けの経済支援・交流イベントや学生の海外派遣プログラム等について積極的な意見交換を行い、大きな学びを得ることができ、両大学が直面する学生派遣にかかる課題も共有することができました。また、国際関係を担当するジェイワ・リー副学長と懇談し、SNUと本学での学生派遣・受入における共通の課題やその対応策について知見を広げることができました。

続く4日（水）には、本学からの参加者とともにSNUからの参加者が本学へ移動し、5日（木）、6日（金）は、低温科学研究所、附属図書館本館、オープンイノベーションハブ「エンレイソウ」、総合博物館を見学した他、学生交流ステーション、高等教育推進機構、国際部を訪問しました。学生交流ステーション、高等教育推進機構では、本学の他の職員も交え、本学における学生派遣・受入プログラムや外国

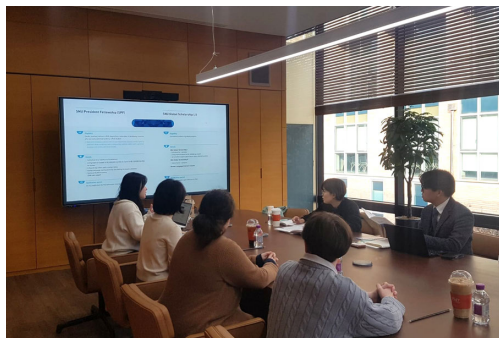
人留学生への支援全般について積極的な意見交換を行いました。国際部では、本学の国際戦略や海外からの来訪者に対するプロトコル等について幅広い情報を共有し、参加者からは、本学に国際戦略のための部署があることが印象的であり、今後のSNUの国際化について大きな示唆を受けたとの感想が寄せられました。

本研修は、両大学の参加者が事前に相手先の要望を聞き取った上で研修計画を立て、基本的に英語を用いながら5日間行動を共にします。このため、語学力向上を図ることはもちろん、業務に関連する多くの学びや気づきを得られる貴重な機会となりました。参加者からは、職員同士の交流継続を望む声も寄せられており、今後も活発な交流事業の展開が期待されます。

（国際連携推進本部、国際部国際企画課）



リー副学長（中央）との記念写真



SNU国際部での意見交換



本学高橋理事室にて



本学学務部での意見交換

「北海道大学GHGインベントリ2022」を策定

本学は10月に、本学の温室効果ガス（Greenhouse Gas 以下、GHG）に関する排出量等のデータを体系的にとりまとめた「北海道大学GHGインベントリ2022」を策定しました。

「北海道大学GHGインベントリ2022」は、カーボンニュートラルの実現を見据え、本学のGHGに関する実情を適正に把握するために、GHG排出量等のデータを体系的にまとめたものです。策定に当たっては、GHG排出量の算定・報告に関する国際基準となっているGHGプロトコル*1等を参照の上、国際協定や国の政策で規定される7種類のGHG（CO₂、CH₄、N₂O、HFCs、PFCs、SF₆、NF₃）を算定対象に、Scope1・2・3*2の分類に基づき、本学の全ての拠点におけるGHG排出量を算定しています。

今後は、本インベントリを基礎データとして活用しながら、カーボンニュートラルに関する目標や計画等を順次策定する予定です。また、GHG排出量等の状況を経年で確認し、気候変動対策の効果を評価・検証するため、今後もインベントリを定期的を作成し、広く社会に公表・報告していく予定としています。

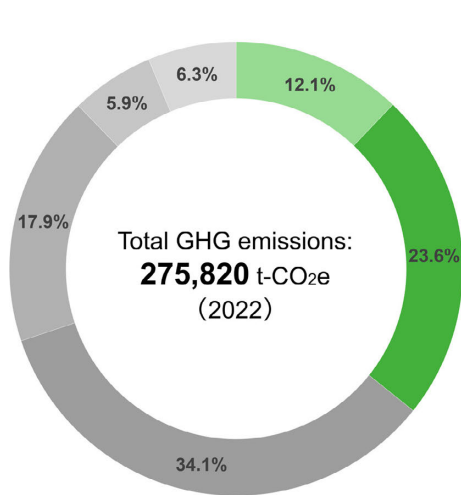
- 北海道大学GHGインベントリ2022
掲載URL
<https://www.sustainability.hokudai.ac.jp/repository/ghg/>

*1 GHGプロトコル … 米国の環境NGOである「世界資源研究所（World Resources Institute, WRI）」及び「持続可能な発展のための世界経済人会議（World Business Council for Sustainable Development,

WBCSD）」を中心に世界中の事業者、行政組織、NGO、学術組織など様々な利害関係者が参加し、その合意に基づいてGHGの算定・報告基準を開発するためのプロセス。

- *2 Scope1・2・3 … GHGプロトコルにおける、GHG排出量の分類。定義はそれぞれ以下のとおり。
- ・ Scope1（直接排出量）
事業者自らのGHGの直接排出（燃料の燃焼、工業プロセス）
- ・ Scope2（エネルギー起源間接排出量）
他者から供給された電気、熱・蒸気の使用に伴う間接排出
- ・ Scope3（その他の間接排出量）
Scope1、Scope2以外の間接排出（事業活動に関連する他者の排出）

（サステナビリティ推進機構）



※表中の合計値は、小数点以下の値も含めて合算しているため、同表中の内訳の数値を合算した場合と一致しない部分があります。

本学のGHG排出量（2022年度）

Scope1	33,478 t-CO₂e	12.1%
・ エネルギー起源CO ₂	30,433 t-CO ₂ e	
・ 非エネルギー起源CO ₂	44 t-CO ₂ e	
・ CH ₄	546 t-CO ₂ e	
・ N ₂ O	317 t-CO ₂ e	
・ HFCs	2,125 t-CO ₂ e	
・ PFCs	0 t-CO ₂ e	
・ SF ₆	12 t-CO ₂ e	
・ NF ₃	0 t-CO ₂ e	
Scope2 (※マーケット基準)	65,116 t-CO₂e	23.6%
・ エネルギー起源の間接排出	65,116 t-CO ₂ e	
Scope3	177,226 t-CO₂e	64.3%
・ カテゴリ1	94,071 t-CO ₂ e	
・ カテゴリ2	49,396 t-CO ₂ e	
・ カテゴリ3	16,367 t-CO ₂ e	
・ カテゴリ4～15	17,393 t-CO ₂ e	
Total (Scope1+2)	98,594 t-CO₂e	
Total (Scope1+2+3)	275,820 t-CO₂e	

日経ESGに総長インタビュー記事を掲載

寶金清博総長が「日経ESG経営フォーラム」からインタビューを受け、日経ESG令和7年1月号及び日経ESGのホームページにインタビュー記事が掲載されました。

「日経ESG経営フォーラム」は、日本のESG（環境（E）、社会（S）、ガバナンス（G））をリードし、国内外への情報発信・情報収集などを行う組織で、企業や自治体など271の組織が会員として参加しており、大学としては本学が唯一の参加となります（令和7年1月1日現在）。

本インタビューは、令和6年度から本

学が「日経ESG経営フォーラム」の一般会員となったことを受け、酒井耕一日経BP総合研究所ESGフェローが聞き手となり、10月25日（金）に事務局にて行われました。寶金総長からは、令和5年7月に公表した「HU VISION 2030」、同6年8月に策定した「北海道大学サステナビリティ宣言」及び同年11月に発行した「北大Ambitious債」（インタビュー時は発行予定）などについて紹介したほか、最後に北海道の飛躍、経済成長に関して、本学は人材育成等で貢献したい旨を述べ、インタビューは終了しました。

なお、本学教職員及び学生に限り、日経ESG経営フォーラムの会員専用サイトから、「日経ESG」の記事閲覧及び会員限定ウェブセミナーのアーカイブ動画を視聴することが可能となっています。

※インタビュー記事は、日経ESGのウェブサイトにも掲載されています。
<https://project.nikkeibp.co.jp/ESG/atcl/column/00006/121200490/>

（サステナビリティ推進機構）

The screenshot shows the Nikkei ESG website interface. At the top, there's a navigation bar with 'Feature', 'Hot Issue', 'Opinion', 'Leaders', and 'More News From NikkeiBP'. The main content area features an article by Shigeo Takahashi, President of Hokkaido University, discussing the university's 'HU VISION 2030' and its focus on education, research, and social co-creation. The article is dated 2024.12.26. To the right, there are promotional banners for 'TSSS 2024' (Sustainable Food Summit) and the 'Nikkei ESG Management Forum'. Below the main article, there's a 'Ranking' section with various news items and an 'English' section with international news links.

掲載記事（日経ESGウェブサイトより）

北大生協北部食堂に「浄水型ウォータースタンド」を設置

サステナビリティ推進機構は、令和6年11月に北海道大学生活協同組合（以下、北大生協）の協力のもと、「浄水型ウォータースタンド」2台を北大生協北部食堂に設置しました。

今回設置した「浄水型ウォータースタンド」は、水道水栓直結型で、ナノトラップフィルターを通すことで、ミネラルはそのままに、水本来のおいし

さを味わうことができるものであり、学生・教職員だけでなく、一般市民の方々も持参したマイボトルに直接給水することができます。

本学は、「浄水型ウォータースタンド」の設置を通して、マイボトルの普及を促進し、プラスチックボトル消費量の削減に貢献していくことを目指しています。

浄水型ウォータースタンド

設置場所：北大生協北部食堂

利用時間：8:00～19:00（食堂営業時間に準じます）

設置スタンド：トリニティ（ウォータースタンド株式会社）2台

温度仕様：常温水・冷水

（サステナビリティ推進機構）



マイボトル普及促進ポスター



マイボトルに給水する様子

「第20回世界冬の都市市長会議」において 加藤 悟サステナビリティ推進機構教授が講演

12月17日（火）から19日（木）の3日間、札幌コンベンションセンターにおいて「第20回世界冬の都市市長会議」が開催されました。

「世界冬の都市市長会」は、“冬は資源であり、財産である”というスローガンのもと、気候や風土の似ている世界の北方都市（冬の都市）から市長等が集まり、冬の技術、経験及びまちづくりの取り組みを学び合う、世界9カ国22都市が会員となっている国際ネットワークであり、本会議は「世界冬の都市市長会」の主要事業となっています。

第20回目となる今回は、メインテーマを「冬の都市の新たな可能性～持続可能な社会の実現～」に据え、非会員

都市を含む8カ国・約20都市の市長等が参加しました。

本会議では、冬の都市に共通するエネルギー課題について考える機会とするため、特別テーマ「冬の都市におけるGX（グリーントランスフォーメーション）」に関する講演会が設けられ、本学からは、加藤 悟サステナビリティ推進機構教授が「北海道大学が取り組むGX」と題して12月18日（水）に講演を行いました。

加藤教授は、日本における再生可能エネルギー導入の現状について説明するとともに、本学の取り組みとして、ネイチャーポジティブ*1と地域社会ポジティブ*2を両立させる社会システム

の実装を目指している共同プロジェクト拠点「リニューアブルエネルギーサーチ&エデュケーションセンター（REREC、令和6年6月設置）」や、世界のGXを牽引できる人材育成及び卓越研究とその社会実装を両立する研究センターの設置等に向けた構想について紹介しました。

- *1 ネイチャーポジティブ … 地域の適切な環境影響評価を行い、自然資本をサステナブルに活用すること。
- *2 地域社会ポジティブ … 地域のコミュニティデザインと地方創生を実現すること。

（サステナビリティ推進機構）



講演する加藤教授

中学生対象の体験型科学実験教室を開催

ダイバーシティ・インクルージョン推進本部（以下、DEI推進本部）と情報科学研究院、理学研究院、工学研究院は、公益財団法人KDDI財団との共催で、中学生対象の体験型科学実験教室を開催しました。本企画はKDDI財団の「青少年啓発・育成活動助成」を受け実施しています。開催にあたり、札幌市内の中学校にチラシを郵送し参加を募り、抽選で選ばれた中学生と保護者が参加しました。

1) 情報科学研究院『『感じて』動くロボットを作るには』

12月14日（土）開催（参加者10名）

情報科学研究院の小林孝一教授による内容説明と講義を受けた後、TAの大学院生のサポートを受けながら車輪型移動ロボットを作成しました。完成後はプログラムを作成し、紙に書かれた黒い線の上を指示通り動くよう調整を繰り返しました。終盤には複雑に曲

がりくねった線での実装を体験しました。

2) 理学研究院「数学で4次元が見える～多面体の形を数える」

12月15日（日）開催（参加者14名）

理学研究院数学部門の松本圭司教授から多面体の構造について説明を受けた後、展開図から多面体を組み立て、構成する線や面の個数や座標での表し方について学びました。さらに、数学を使って、実際に見ることのできない4次元空間での対応物の面の個数などを数える課題に熱心に取り組みました。

3) 工学研究院「北大工学部まるごと体験ツアー」

12月26日（木）開催（参加者38名）

工学研究院応用量子科学部門の松浦妙子教授による工学部の紹介と講義を受けた後、「材料」「地下環境」「医療」の3チームに分かれ、各研究分野の

特色を生かした実験を体験しました。NSSOL Dining（工学部食堂）で大学院生と一緒に昼食を取った後、LINAC（直線加速器）の説明を受け、超高压電子顕微鏡を見学しました。懇談の時間には参加者から進路や学生生活等についての様々な質問が寄せられ、工学分野への関心の高さがうかがえました。

全ての企画において定員を超える応募があり、中学生や保護者からの関心の高さを実感しました。今後も各部署等の協力をいただきながら、継続的に事業を実施していきたいと考えています。

その他のDEI推進本部の活動については、Webサイトをご覧ください。

<https://www.dei.hokudai.ac.jp>

（ダイバーシティ・インクルージョン推進本部）



TAのサポートを受けてロボットを作成（情報科学研究院）



多面体作製に向けて説明を受ける参加者（理学研究院）



原子力環境材料学の実験体験（工学研究院）

■ 部局ニュース

生命科学院博士後期課程科目少人数討論型育成プログラム (北大帝人ブレインストーミングワークショップ) 「自分の研究・アイデアをビジネスにしよう」を実施

博士後期課程を対象とした生命科学院選択科目及び大学院共通授業科目として、帝人株式会社と連携して少人数討論型育成プログラム（北大帝人ブレインストーミングワークショップ）「自分の研究・アイデアをビジネスにしよう」を実施しました。本講義は平成19年度に初めて開講され、今回で18年目を迎えました。今年度は6月18日（火）から12月24日（火）までの間に全10回のワークショップとして開講され、先端生命科学研究院の石原誠一郎助教が担当し、4名の博士後期課程の学生（生命科学院3名、医学院1名）が受講しました。

本講義では、本学と帝人株式会社の産学連携プログラムとして、研究・アイデアをビジネスにつなげるためのワークショップを行いました。「起業に興味があるけど具体的に何をしたら

よいかわからない」「自分の研究や興味を社会に還元したい」「自分の研究が実際に社会の役に立つのかを知りたい」といった学生に対して、起業を目指している学生には実現のためのサポートを、そうでない学生には起業という選択肢を与えることを目指しました。

全10回のワークショップのうち計6回で、ビジネス提案の立案とプレゼンテーションのブラッシュアップを行いました。6月18日（火）には帝人株式会社からご担当者様をお迎えし、新規事業開発のご講演を行っていただきました。また、9月17日（火）には帝人株式会社のご担当者様から、企業におけるダイバーシティ&インクルージョンのご講演をいただきました。

最後に、12月24日（火）には東京の帝人株式会社本社にて最終報告会を開催しました。受講生は、テイジン未来

スタジオにて帝人株式会社の開発した商品について学ぶとともに、ビジネス提案について最終発表を行い、帝人株式会社のご担当者様から多くのコメントや質問をいただきました。さらに、帝人株式会社の3名のご担当者様と面談を行い、企業における研究開発の実情や受講生の将来や進路について多くのご情報、ご助言をいただきました。

本講義を進める上でお力添えいただいた帝人株式会社のご担当者様をはじめ、ご協力いただいた全ての方々に感謝申し上げます。受講生の皆様がこの経験を活かし、産学含め、どの進路に進むとしても大いに活躍することを祈っています。

(生命科学院・先端生命科学研究院)



最終報告会の様子

第19回医学研究院連携研究センター研究成果発表会を開催

医学研究院連携研究センターは、12月25日（水）に医学部学友会館フラテホールにて、第19回医学研究院連携研究センター研究成果発表会を開催しました。

本センターは、長期的展望に基づいて堅実な知を追求する基盤的研究と、目標と期間を設定して先端的・革新的な研究開発を目指す戦略的研究の融合を図ることを目的として、平成18年4月

1日に設置した学際的研究拠点です。これまで、大型研究プロジェクトを中心として多彩な研究活動が展開され、医学・生命科学と理工学の融合領域において、世界をリードする数多くの研究成果が得られています。

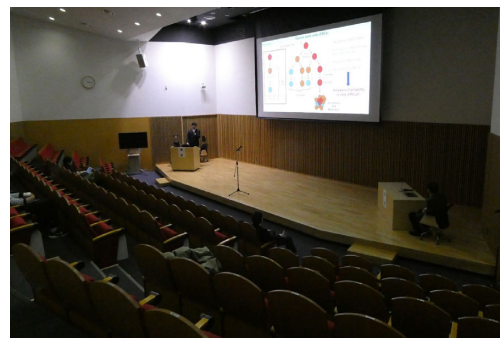
今回の研究成果発表会には、53名の教職員・学生等が参加し、センターの各分野から最新の情報が提供され、活発な質疑応答が行われました。

また、特別講演として、京都大学大学院医学研究科の小川誠司教授が「体細胞モザイクとがんのクローン進化」と題して講演を行いました。参加者にとって、今後の取り組みに向けた、新たな可能性が示唆された研究成果発表会となりました。

（医学院・医学研究院・医学部）



質疑に答える京都大学の小川教授



研究成果発表会開催の様相

工学研究院・情報科学研究院・量子集積エレクトロニクス研究センター・工学系事務部で「安全保障輸出管理FD・SDセミナー」を開催

工学研究院・情報科学研究院・量子集積エレクトロニクス研究センター・工学系事務部は、12月24日（火）に安全保障輸出管理FD・SDセミナー「アカデミアにおける安全保障輸出管理」を開催しました。

多様なパートナーとの国際共同研究や、研究者・学生の交流拡大による国際化の進展により、安全保障に関連する技術の流出の懸念がますます高まっている中、大学における安全保障輸出管理体制等のあり方についての理解を

深めることを目的として開催しました。

セミナーは講師2名による対面形式で行われ、教職員46名が参加しました。まず、北海道警察の担当者からは、アカデミアにおける技術流出の実態と対策について、続いて産学・地域協働推進機構の井内健介教授からは、学内手続きと法令理解のポイントについて、具体例を挙げて実務的な視点での説明がありました。

参加者からは、「日々の教育・研究活動における安全保障輸出管理のリス

クを身近に感じることができた」「事前確認シートの重要性を再認識できた」などの声があり、大変有意義なセミナーとなりました。

なお、井内教授の講演は、当日参加できなかった教職員の研修機会として、e-ラーニング教材として活用しています。

（工学研究院、情報科学研究院、量子集積エレクトロニクス研究センター、工学系事務部）



開会挨拶をする幅崎浩樹工学研究院長



講演する井内教授

環境科学院・地球環境科学研究院でFD研修会を開催

環境科学院・地球環境科学研究院では、1月10日（金）に令和6年度のFD研修会を、環境科学院においてオンライン配信を併用したハイブリッド方式で開催しました。ダイバーシティ・インクルージョン推進本部副本部長を務める、保健科学研究院の矢野理香教授を講師に迎え、「心理的安全性の高いチームとは？：多様性から成果を生み出すために」と題し、質疑応答を含め

約1時間の講演を行いました。

谷本陽一地球環境科学研究院長・環境科学院長による開会挨拶の後、講演では、「心理的安全性とは？ぬるま湯組織との違い」「心理的安全性が注目されている背景」「心理的安全性のメリット」「心理的安全性が低い職場で生まれる四つの不安」「研究紹介」「心理的安全性の高いチーム作りとは？」などについて、実例を交えなが

ら説明しました。講演の最後には、質疑応答が行われ、多くの教員から質問や意見が活発に出され、参加者の関心の高さがうかがえました。

当日は、対面及びオンライン利用合わせて50名の教職員の参加があり、大変有意義な研修会となりました。

（環境科学院・地球環境科学研究院）



講師の矢野教授



谷本研究院長・学院長による開会挨拶

「森のたんけん隊2025冬」を開催

北方生物圏フィールド科学センターでは、雨龍研究林（幌加内町）を舞台に、1月9日（木）、10日（金）の1泊2日で、小学4～6年生向け野外プログラム「森のたんけん隊2025冬」を開催しました。幌加内町教育委員会及び名寄市北国博物館と共催のイベントで、毎年この時期に実施しています。

今回の参加者は25名で、幌加内町、名寄市のほか、美深町、下川町、旭川市からも集まり、昨年に引き続き参加した方もいました。

参加者はお昼前に集合し、昼食をとると、森へ出発しました。前日からの強い風雪はお昼過ぎには弱まり、子ども達は、スタッフが事前に森の中に準備したクイズ7箇所を歩いて巡りました。ここで勉強するのは、木の種類や見分け方、木の高さや太さの測り方、森の中での方位や距離の測り方などです。森の中は、かんじきを履いても歩きにくいフカフカの新雪でしたが、子ども達は元気よく森の中を探検し、クイズを解きました。

暖かい部屋に戻ってクイズの答え合

わせをした後は、また外へ出て、雪のブロックを皆で加工し、秘密基地（イグルー）とそれを囲むスノーランタンを作りました。イグルーが完成すると早速、中に入って秘密基地の気分を満喫しました。最後にライトを消して、ランタンの灯りだけの世界を楽しみました。

夕食後は、雪と塩を使ってアイスを作りました。まず、雪に塩を混ぜるとどうなるのか実験をしました。みるみる温度が下がる様子と、それを解説するスタッフの話に、子ども達は興味津々でした。実験のあとは好みの味のアイスを作りました。雪と塩で冷やされたアイスは見事に固まり、お風呂の後のデザートになりました。

翌日は好天に恵まれ、午前のプログラムは「宝さがし」でした。4班に分かれ、雪の中深く埋められた宝箱を目指しました。スタッフが用意したヒントは「南東に30m進んだところにある、直径が50cm以上のドングリになる木」といったように、昨日のクイズや課題で得た知識が問われるもので、

チームワークも求められました。お昼は野外で「雪原パーティ」を行いました。火を囲んで温かい食事をとった後には、雪遊びやスノーモービルの試乗体験も楽しみました。

プログラムの運営は、研究林の教員・技術・事務スタッフと、共催している教育委員会・博物館の職員が共同で行っています。多様なスタッフがそれぞれの経験や知識を生かすことで、プログラムの質を高めてきました。冬山での活動になり、また親の付き添いなしでの宿泊も伴うので、安全・健康面には細心の注意を払っており、今回も無事に開催できたことが何よりです。イベントを通して地域の中でのつながりが深まることもこのプログラムの大きな意義となっています。今後も、こうしたイベントを通して、森の多様性や人と森のかかわりを子どもたちに伝えていきたいと考えています。

（北方生物圏フィールド科学センター）



クイズ（木の直径を測定）



イグルーの作成



雪と塩の実験



宝さがし（高さ測定）

環境健康科学研究教育センター公開セミナー 「日本におけるプラネタリーヘルスの取り組み」を開催

環境健康科学研究教育センターは、1月17日（金）、医学部百年記念館において公開セミナーを開催しました。

本セミナーは、広島大学の鹿嶋小緒里准教授を講師としてお招きし、「日本におけるプラネタリーヘルスの取り組み～広島大学プラネタリーヘルス・イノベーションサイエンスセンターの活動より～」と題して講演を行いました。鹿嶋准教授は、広島大学にてIDEC国際連携機構の副機構長、及び同大学プラネタリーヘルスイノベーションサイエンスセンター（以下、PHIS）のセンター長を務められています。

プラネタリーヘルスとは、「地球の健康」と「人間の健康」は密接に関係

しているという考え方のことです。地球と人間の変化によって、互いどう影響を与え合うかという新たな視点から課題を包括的に捉えていくことができます。

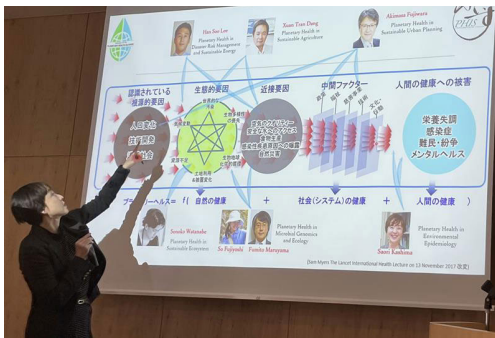
広島大学ではプラネタリーヘルスに関する活動が進められており、令和2年には理学・工学・農学・健康科学の専門領域を連携させた学際的研究拠点を構築することを目的として、PHISが設立されました。今回のセミナーでは鹿嶋准教授より、PHIS設立の経緯とその活動内容に加えて、プラネタリーヘルスの基礎知識から世界的な広がりについて、ご講演いただきました。参加者から多くの質問があり、活発な

議論が交わされました。

また、講演の後は意見交換会を開催しました。プラネタリーヘルスを学部及び大学院の講義にどう組み込んでいくか、ポストSDGsとして学生や教職員がどのように取り組んでいくべきか等について深く話し合われました。

なお、本事業は、北海道大学ダイバーシティ・インクルージョン推進本部「女性研究者招へい支援」の支援を受けて実施されました（事業責任者：環境健康科学研究教育センター特任准教授 アイツバマイゆふ）。

（環境健康科学研究教育センター）



鹿嶋准教授による講演



集合写真

自分に合ったツールが見つかる「文献収集・管理ツール講習会」を開催

附属図書館では、10月末から11月中旬にかけて、「知って・選んで・使う 文献収集・管理ツール講習会」を開催しました。本講習会は、利用目的が同じツールの講習会を「シリーズ」として開催することにより、機能等を比較しやすくし、利用者が必要に応じて適切に選択できることを目指したものです。

10月30日（水）には、エルゼビア・ジャパン株式会社の高橋梨辺香氏を講師に招き、Zoomにて「Mendeley編」を開催しました。ScienceDirectでの文献収集やMendeleyを用いた文献管理・活用の方法に加え、レポート・論文の書き方についても説明がありました。

11月6日（水）には、クラリベイト・アナリティクス・ジャパン株式会社の熊谷美樹氏を講師に招き、Webexにて「Web of Science + EndNote編」を開催しました。Web of Scienceでの文献調査・分析方法やEndNoteオンラインを用いた文献管理・活用の方法について解説がありました。11月14日（木）には、Zoteroの開発にも携わった、本学メディア・コミュニケーション研究院のミヒヤエル・シルツ准教授を講師に招き、附属図書館北図書館セミナー roomで「Zotero編」を開催しました。受講者はインストールの手順から基本的な使い方まで、実際の画面を見ながら自身のパソコンを操作し学習し

ました。

また番外編として、11月7日（木）には本学統合URA本部と共催で、熊谷氏を再度講師に招き、「Pivot-RP編」をWebexにて開催しました。若手研究者に向けて、研究資金獲得機会の案件及び研究者プロフィールの情報共有・検索が可能なツールであるPivot-RPが紹介されました。

実施後のアンケートでは、複数のデータベースや文献管理ツールを比較する機会となったとの回答も多く寄せられ、有意義な講習会となりました。

（附属図書館）

知って 選んで 使う!

文献収集・管理ツール オンライン講習会

レポート・論文作成に役立つ文献収集・管理ツールの講習会を実施します。3回に分けていくつかのデータベース・文献管理ツールを紹介します。どれかひとつだけでも参加可能です。自分に合ったツールを見つけましょう!

こんな悩み、ありませんか?

- 後で見たい論文のタイトルをコピペ、コピペ、コピペ.....
- 投稿先ごと文献リストを直すの面倒
- あれ、あの論文どこで見たんたる?
- この論文って前にも読んだことある?

タイトル	日時
◆レポート・論文の書き方 まずはここから!	10/30(水)
◆文献の探し方から管理まで Part I『Mendeley』編	14:45-16:15
◆文献の探し方から管理まで Part II『Web of Science』+『EndNote』編	11/6(水) 17:00-18:40
◆オープンソースの文献管理ツール『Zotero』の紹介 ※対面形式 オンデマンド配信あり	11/14(木) 16:30-17:30

参加申込・詳細はこちらから
<https://www.lib.hokudai.ac.jp/2024/09/20/164719/>

海外研究費情報に関心のある方はこちらもチェック!
 【研究者向け】『Pivot-RPのご案内』11/7(木)

お問合せ:北海道大学附属図書館 学習支援企画担当 mail:nref@lib.hokudai.ac.jp

講習会のポスター



Zotero講習会の様子

■表敬訪問

海外

年月日	来訪者	来訪目的
7.1.21	ナイジェリア疾病予防センター Jide Idris 総裁	今後の交流に関する懇談



Jide Idris ナイジェリア疾病予防センター総裁
(右から8人目)

(国際部国際連携課)

人事

令和7年2月1日付発令

新職名(発令事項)	氏名	旧職名(現職名)
【教授】 大学院法学研究科教授 大学院理学研究院教授 大学院歯学研究院教授	川久保 寛 澁川 陽一 李 智媛	大学院法学研究科准教授 大学院理学研究院准教授 大学院歯学研究院助教

新任教授紹介

令和7年2月1日付

法学研究科教授に

川久保 寛 氏

法学政治学専攻現代法講座



理学研究院教授に

澁川 陽一 氏

数学部門数学分野

生年月日

昭和55年12月11日

最終学歴

北海道大学大学院法学研究科博士後期課程修了(平成25年3月)
博士(法学)(北海道大学)

専門分野

社会保障法

生年月日

昭和40年12月29日

最終学歴

早稲田大学大学院理工学研究科修士課程修了(平成2年3月)
博士(理学)(早稲田大学)

専門分野

ヤン・バクスター方程式、ホップ重代数



歯学研究院教授に

李 智媛 氏

口腔医学部門口腔健康科学分野

生年月日

昭和53年5月16日

最終学歴

韓国啓明大学大学院自然科学系列食品加工学科博士課程(平成19年8月)
Ph.D(理学)(啓明大学)

専門分野

骨細胞生物学、骨代謝研究、アルツハイマー研究

編集メモ

- 寶金清博総長がこの度、一般社団法人日本ソムリエ協会のソムリエ・ドヌール（名誉ソムリエ）に就任しました。ソムリエ・ドヌールとは、国内外において、これまでワインを中心とする飲物の普及とソムリエの育成に功績のあった人物に対し、一般社団法人日本ソムリエ協会より授与される称号です。

本学では寶金総長のもと令和4年4月に北海道ワイン教育研究センターを設置し、ワイン産業発展のための人材育成及び総合的なワイン研究に取り組んでおり、このことが評価され、今回の称号授与に至りました。



名誉ソムリエ認定書を手にする寶金総長

裏表紙メモ

今月のキャンパス風景は古河講堂です。

ふと足元を見ると、札幌キャンパスの冬の風物詩が、ひっそりと佇んでいました。寒空に遥か高く浮かぶ雲を、一人静かに見つめています。

立春を過ぎて暦の上ではもう春ですが、札幌キャンパスではまだまだ寒い日々が続きそうです。

キャンパス風景 **59** 古河講堂（北9条西7丁目）



北大時報 ② No.851 令和7年2月発行

北海道大学社会共創部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL : (011) 706-2610 / FAX : (011) 706-2092 / E-mail : kouhou@jimuhokudai.ac.jp

<https://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/jihou.html>